

■巻頭言■

はじめに

齊藤光實

神奈川大学総合理学研究所 所長

Preface

Terumi Saito

Director of the Research Institute for Integrated Science, Kanagawa University

大学は今大きな変化にさらされている。少子化による受験生の減少である。大学院を含めて大学は多かれ少なかれ学生の取り合いをせざるを得ない状況に追い込まれている。わが理学部も当面のこの問題を乗り越えなければならないのは当然のことではあるが、しかし大学の危機は単に少子化という外部要因だけではない。

明治時代の鋭い評論で鳴らした斎藤緑雨(1867-1904)は「教育の普及は浮薄の普及」と書いたそうである。教育が普及した結果、浮薄人間がたくさん生ずるということでもあるし、大学が多くできれば当然教師の質も下がり、大学教育も浮薄となり、ひいては学問の浮薄を引き起こすともいえる。さらに科学技術の進歩が世界的な浮薄を引き起こしているという面もある。

科学技術は、哲学、文学、芸術とは根本的に違い、現在の成果を簡単に利用できるという性格を持つ。2000年以上昔のミロのビーナスがなにゆえ現代でも珍重されるのか。現代人がミロのビーナスの作り出す美を簡単には再現できないところにあるからである。あの美を作るにはあの美を作った人の内面に迫り、それを経験し、それを再現できるまでに成長する必要があるのではないか。だからして簡単にホ

イホイと誰もが過去の傑作を再現できる訳ではないのである。しかし科学は芸術の姉妹であるが、科学が生み出す技術には少し違う面がある。4年生でも勉強すれば科学の最前線にある程度理解することが出来るし、また最前線の研究を行うことも不可能とはいえない。遺伝子のクローニングは20年前にはかなり大変なことであったが、いまではPCR (polymerase chain reaction) という技術が普及したため、何も知らない初心者でも、DNAと試薬を混ぜるだけで出来てしまう。これを浮薄といわずして何が浮薄であろうか。このような性質を科学技術の「可積性」と仮に呼ぶとすれば、科学技術は「可積性」に富み、哲学、文学、芸術等は「可積性」に乏しいといってよい。この「可積性」によって科学技術には新しい発見と真理に常に浮薄を呼び込む側面があるのではないのか。理学部の重要な役割一つは科学技術の持つこの危険な性質に警告を発し、中身のある人間を生み出すことにある。

研究所の年報は本巻から新しい装いで出発する。年報としての役割の他に学術雑誌としての側面も加えることになった。所員の皆様、ご関係の皆様のご理解とご支援を賜りたい。